

念仏講と念仏踊

——房総の念仏芸——

三隅治雄

念仏芸の分布

わが国の民俗芸能で、とりわけ目立って分布の広いのは、念仏系統の歌舞である。

南無阿弥陀仏の六字の番号や念仏歌謡の類を唱和し、かつその唱言にのって踊躍するのがその基本だが、さらに、念仏の教えをドラマの形に仕立てた念仏狂言や、練り物にしてみせる菩薩来迎会（迎講）などもあり、また、いまは念仏は唱えないが、信仰的にも技法的にも念仏の歌舞が基盤になって伝承されてきた、いうなら念仏もどきとも称すべき歌舞が、各地にさまざま分布している。

このことは、わが国の民間において、念仏信仰がいかに普及し、かつ、その信仰に伴う儀礼がいかに民衆の芸能を興す刺激剤に長い世代なってきたかを物語るものであるが、さて、全国を通観してみると、ことさら念仏芸の広範囲の分布をみるのは、関東では房総地方である。

それも、数が多いというばかりではない。種類が多彩なのである。

すなわち、わたしなりの分類では、念仏系統の芸能は、それを演じる目的で分けると、

- ① 修行念仏（みずからの修行として修する念仏）
- ② 供養念仏（仏菩薩や死者への供養に修する念仏）
- ③ 祈禱念仏（豊作祈願や病氣退散祈願のための念仏）
- ④ 布教念仏（布教のために特に仕組んだ説教や踊や狂言）
- ⑤ 余興念仏（念仏儀礼に添えて余興的に演じる歌舞。踊や歌の基調は念仏に抛りながら、表面的には念仏も口唱せず、扮装もはでにする形が多い。念仏のもどき芸であり、派生的念仏芸である。）

の五種類になるが、房総地方には、このどれにも該当する念仏芸が相当量に伝承されているのである。すなわち、

① 修行念仏 念仏講における月次念仏・お十夜念仏

② 供養念仏 念仏講における葬式・年忌・彼岸・盆・お十夜などの念仏

③ 祈禱念仏 念仏講における天道念仏・虫送り念仏・雨乞い念仏・厄除け念仏など

④ 布教念仏 鬼来迎きらいよう

⑤ 余興念仏 おしやらく・粉屋踊・のほほん踊・小念仏・踊り花見・鹿島踊など

これだけのものが、どういう経路で各地に分布したのか。そして、相互にどのような交流があり、また、これらの念仏芸が土地土地の他の歌や踊の生成にどのような影響を与えたのか、などの問題は、当然わたしどもの問い糺したい点で、したがって小論では、ごく大まかながら、房総地方における念仏芸の伝承の基盤を考察し、その基盤に立ちながら、本来儀礼の性格の強い念仏のわざがどういう筋道で芸能としての色彩を強めていったのか、といったことを、順次点検していきたいと思う。

念 仏 講

房総地方の念仏信仰の流布を考える時、まずその信仰の拠点として捉えられるのは、村々にある念仏講の存在である。

昭和四十九年、千葉県教育委員会で刊行した『千葉県民俗地図』によれば、昭和四十五、六年度の調査時点で捉え得た県内の念仏講の数は七十にのぼっている。もっとも、わたしなどが村々をたずねると、いまはないが戦前まではやっていた、いや昭和二十年代まではあった、などという話をよく聞くから、昔はこれの何倍も各地に存在していたに違いない。

念仏講は、いうまでもなく、村うちの親しい者同士が寄り合って「南無阿弥陀仏」の名号を詠唱し、また和讃などを

も唱和する集まりである。近所の葬式や年忌法要にはきまって出掛けるので葬式組と呼ばれたりするところもあるが、しかし、この講の活動は、単に死者の供養にのみ示されるものではない。

県下全域を通覧すると、葬式・年忌のような個人対象の随時の供養行事のほか、正月とか二月十五日、春秋彼岸、盆、十夜などの年間定期の行事に参画し、また、雨乞いや虫送りなどの農耕にかかわる祈禱儀礼やさらに新築祝いの儀礼にも積極的に参加して、村落生活の中できなり重要な役割を果たしてきたことが指摘される。

たとえば、県下の念仏講の中で、昔ながらの活動をいまでも維持していることで名高い印旛郡印西市武西の念仏講は、年間次のようなスケジュールで講を持つ。

- ① 鉦起し念仏（正月十六日）
- ② 天道念仏（二月十五日）
- ③ 春季彼岸念仏（春彼岸期間中）
- ④ 虫送り念仏（田植後）
- ⑤ 盆の棚念仏（八月十六日）
- ⑥ 秋季彼岸念仏（秋彼岸期間中）
- ⑦ 鉦伏せ念仏（十二月十六日）

右のうち、①と⑦は、当年の念仏始めと念仏納めの集会で、この期間、毎月一日には「月次念仏」と称して、講の会場である武西青年館（もとは地区内の天台宗寺院の安養寺）に講員が集まって念仏を修する。

講員は、他の土地もほとんどそうだが、武西でも隠居身分の男女住民が有資格者で、月々の集まりは、さながら月一回集まって親睦を結ぶ老人クラブの観を呈する。事実、講員たちにとって、講は、世間の情報を交換し合う貴重な場で、また、念仏勤行のあとで茶・菓子をいただきながら披露し合う歌や踊の交歓は、集落内における有力な芸能伝承の

母胎になるものであった。

また、年間の集会のうち、彼岸・盆の念仏は、いうまでもなく、死者供養を目的とした勤めであるが、②の天道念仏と④の虫送り念仏は、共に農耕祈願を目的とした勤めで、前者は農耕開始期における豊作祈願、後者は、成長期の稲に付く害虫の除去祈願をもつぱらにする。

武西の天道念仏

このうち、天道念仏は、かつては関東のあちこちで行なわれていたもので、いまでは武西ほか県内の一、二のところに残存しているきわめて特色のある勤めである。

「天道」は^{てんどう}おテントさま、つまり太陽のことで、大地に恵みを与える太陽をおがんで五穀の豊作を祈願する儀礼が天道念仏である。

武西では現在二月十五日の当日、会場の青年館広間正面の、常時薬師如来像を奉安してある仏壇の前に日輪をあらわす赤色の幣束を立て、左右に造花を飾り、前に酒や菓子供える。薬師如来の仏壇は、青年館の前身が薬師堂であったことの名ごりで、薬師像の左側には釈迦如来像を安置する。この日輪の幣束は、大日如来をあらわすといい、天道念仏はこの大日様への祈願という形で行なわれるのである。

勤めは午後二時からだが、仏壇の前に講員が五列になってすわり、最前列の男五人はスリ鉦を撞木で打ち、二列目の男二人は、桶胴型の締太鼓を前に据えて二本^{ぼん}打つ。その他は、何も持たぬが、鉦役、太鼓役は講の長老で、ホウガン（法眼・法願などと書く）と呼ぶ。講の長老、指導役をホウガンと呼ぶことは県下一円に普及している。

勤めの次第は、次の通りである。（詞章は、昭和三十年春彼岸堀田良吉筆とある書留に拠った。ただし、記載はあっても現行では省略している文は△を付した。また、祈願文およびさんげさんげは、堀田氏のものにはないので、筆

記者不明の書留を借用した。なお、○印は、鉦または鉦・太鼓を入れる箇所印である。

① 四方固め

棒読みの唱え言。一節終わりの「浄土なり」のところで鉦を一打ちする。

へ抑々東方ニハ護蘭^{ゴラン}常夜又 名号七仏薬師七千夜又瑠璃光如来之浄土也○(諸病疾病信心安楽之御誓願也) 南方ニハ補陀落世界大慈悲之觀世音菩薩之浄土也○ 西方ニハ極樂九品弥陀如来之浄土也○ 北方ニハ五蜀之大導師釈迦无尼如来之浄土也○ 中央ニハ大日大小不動明王天地者两部之満陀羅^{マシダラ}天ナ廿八宿地者卅六神共ニ哀愍^{アイミン}惱照^{ノウショウ}ラセ給フ弥勒菩薩之浄土也○

② 祈願文

ホウガン一人が棒読みに唱える。

へ觀音菩薩ハ三十三神身ヲカエ二十九説法^{セツポフ}法浮^{フウ}ベ供養満^{ミツ}レバ必ズオ願イヲ目出サセ給フ五穀豊穰万民安楽ノ御誓願也

③ さんげさんげ

棒読みの唱え言。終句の「一時礼拝」のあとに鉦を一打ちする。唱え言は三回繰り返す。

へ帰命頂礼 懺悔懺悔^{サンゲ}六根生浄御メニ八代金剛童子ノ梵天帝釋两部ノ大日大量權現哀民能時ノ一時礼拝○

④ 土かけ念仏

ナムアミダブツを全員で詠唱する。鉦・太鼓を常時入れる。

⑤ 上げ念仏

右に同様。

⑥ 称念仏

右に同様。調子を上げ、全般的にリズムミカルに、またメロディックになる。

⑦ 心 経

一同、早いテンポで般若心経を読誦。終始鉦太鼓ではやす。（詞章省略）

⑧ 不動釈迦前文

全員で詠唱。前半往生安樂までは棒読みで、○印のところのみ鉦を入れるが、安樂「国」から旋律的になり、「不動釈迦……」から太鼓と鉦が軽く拍子を取っていく。最後のナムアミダブツのあと、太鼓・鉦の後奏を付けてにぎやかに止める。

ハ 凡字十方三世仏 阿字一切諸菩薩 兀字八万諸聖教 皆是阿弥陀仏○ 願以此功德平等施一切同發菩提心○ 往生安樂國不動釈迦文殊普賢 地藏弥勒藥師觀音 勢至阿弥陀 阿闍大日虚空藏 南無阿弥陀仏 ナムアアミダブ

⑨ 称念仏踊（振りについては小野木倅治氏夫妻の教示を得た）

⑥の称念仏にのって講員が、鉦役・太鼓役・唱え役のまわりを輪になって踊る。踊手は、昔は不明だが現在は女だけが踊る。

踊手は円陣の内側を向いて東立ちになり、次のように踊る。

- ①左足を右足前へ出し、両手を右横上に出す。
- ②右足を左足前へ、両手を右横上に出す。
- ③は①と同じ。
- ④右足を左足に揃え、右手を上にあげて掌をクルリと返す。
- ⑤左手を上にあげて掌をクルリと返す。
- ⑥右足を前に出し、右手を前におろし、左手は掌を上にして胸前にあげる。
- ⑦左足に重心を移し、左手を下に、右手は掌を上にして胸前へ。
- ⑧東立ちになって両手を前で揃える。
- ⑨右足を出し、両手を前に打ち込むようにして左右に流す（地元ではハタタという。）
- ⑩右手を左手前から掬い上げるようにして内にまわす。
- ⑪は⑧と同じ。
- ⑫体を右に向け、左足を前に出し、両手をあげて掌を返す。

全般に、歯切れのよい鉦・太鼓のリズムにのって陽気に踊躍する。手を流して、掬って、カイグリののような形をし

て、手をかざして、掌をクルリとめぐらせるあたり、関東地方の踊念仏の特徴をよく出している。

布施と谷津の天道念仏

以上が武西の天道念仏の次第で、終わると講員一同で茶・菓子をいただいて団欒する。古老の話では、以前、武西以外の字でも念仏講があり、年間何度も集会が行なわれていたというが、天道念仏が武西と同様のものであったかどうかは不明だという。

記録に見るところでは、柏市布施の真言宗寺院東海寺で、例年三月十五日に、老人男女の念仏講員が、棚式祭壇の五方に五色幣を立てて造花を飾り、鏡餅を供え、そのまわりで吊幣を肩にして踊る風があり、これを五穀豊作祈願のための天道念仏と称した。⁽²⁾ また、海岸方面になるが、いまは遊園地として名高い谷津(現習志野市)でも、かつてテントウ念仏が旧暦二月八日から十二日まで行なわれたが、その儀礼の詳細が明治二十三年三月刊行の『風俗画報』十四号に記されている。⁽³⁾

下総国千葉郡近傍の俗陰暦二月初旬より二十日頃迄念仏を修す。同郡谷津村は毎年二月十二日正^{しやうとく}当の日とし、八日より村内の児童十余人群をなし太鼓を首に懸け、鐘打鳴らして拍子を揃へ声を合して「ワァライツチャークンセーナイ、ワァライツチャークンセーナイ」と叫びて村中を軒別に入て藁を求む。(中略) 斯すること二日にして、得たる所の藁は皆な村内の西光寺本堂前に積み置く。(中略) 九日より老人のうち年番と称ふる者五人西光寺本堂に於て支度し、十日朝本堂前に三間四面に柵を構へ、中に耆間四方の台を据ゑ竹を四隅に立て、青黄赤白の紙にて幣束の如き物を挟む。長さ凡そ四尺計其中心には同様にて六尺程の竹の下に椿の折枝を添へ竹がしらより四隅に縄張りして一本二ヶ所ツゝ同様の紙を挟み竹は上の方一尺五寸計紅白の紙を巻きたり。下に大日如來の厨子を安置して正午より開扉す。如來の像は村内字浜宿といふに小堂ありて常に安置しあるを年番なる者今朝是れを背負ふて来る。其形装白衣を

纏ひ白布に髪を覆ふて湯殿行者に扮し十人計なるもの鉦太鼓にて警護す。台の高さ三尺四方に幣束様の物を建て四門を造る。(中略)其両端二尺五寸計の赤幣次に青赤々と交々二尺程なるを隅に至る迄五本ツ、紅白左右は青白の紙を巻き四隅の幣上には作り花を二十本中央三拾本位づゝ結付、台下四方前日兒童が乞ひ得し薬を敷詰めたり。黄昏頃僧誦經。是は村内に西光寺東福寺といふありて二ヶ寺の僧同時に之を勤む。何れも真言宗新義派なり。如来には煉香、線香、又鏡餅三重にして三据り神酒徳利に酒を供ふ是れ兩部にて修する意歟。(中略)老男六十人計柏子を揃へて念仏を修すること十日より十二日に至り皆な西光寺本堂に通夜して年番なる者はが周旋を力む。十二日黄昏よりテントウ踊を為す。踊りといひて躍るにはあらず撰州四天王寺の踊性せうせい仏にひとしく一心不乱に念仏して誠に感にたえて踊る如くに見ゆるなり。但しそれは大和河内の道心者来り十徳を着し云々とあれど、これは皆な村内の老男にて俗衣の儘念仏に鉦太鼓を入れて大日尊の周りを巡るなり。行事は何の遺意たるを知らず只だ五穀成就村内安全を祈るとのみ唯だ聞く(下略)

天道念仏と農耕儀礼

右の記事を見ると、天道念仏の古形とその民俗がよくわかる。

二月八日を開始日とし、この日子供たちが鉦・太鼓をたたいて群行するのは、あたかも東日本の農村で、「コトの神送り」などと称して、災厄神を払うべく子供たちが列をなし、薬人形や幟などを押し立てて、村境に向かって鉦・太鼓をたたきつつ道中する風俗と重なり合う。

旧暦二月は、陽気もよくなつて農耕もやがて始まろうとする季節で、農家では耕作の準備に取りかかる。そして、二月八日あたりをコト始めなどと称して、当年の農作を祈願する祭事を家々で行なつた。おそらく、そうした習俗が根本にあつて、それから、農耕にさわる災厄を払うコトの神送りなどの儀礼が生まれたのではないかと思うが、さらに村に

よつてはコト念仏などと称して、この日に村人が集まって珠数を繰りながら百万遍の念仏を唱えたり、また鉦・太鼓をうちはやしつツナンマイダンボを繰り返し唱えたりすることが行なわれた。

これは災厄の根源である厄神・怨霊の荒御魂を鎮めるには念仏にしくはないとした信仰に依るものと思われるが、それにさらに、作物の成育に欠くべからざる太陽の化身としての大日如来を持ち出して、時あたかも陽氣の燃え立ち始める二月八日、あるいはそれから中旬に至るあいだに、太陽の恵みによっていかに農作物がみのるか、また仏の力によっていかに災厄が除かれるかという法事を行なった。それが、いわゆる天道念仏の、農村に定着する民俗的要因であったと思われる。

また、いま一つ、房総を含めて関東の農村では、正月から二月にかけて、俗にオビシャと称する祭事を集落を挙げて行なうことが多い。ビシャは元来歩射のことで、年の初めに当年の豊凶を占うために、村人が立ったままで弓を射る。そしてそのあと村人が神前で共飲共食して当年の豊作を祈願するという祭事である。この祭事では、酒宴の折り、前年の当番から今年の当番に当渡しをする儀礼が特に重要で、謡の交換や盃の応酬が厳重に行なわれ、近代ではオビシャといえ、この盃事が中心行事になっているくらいである。

ところが、谷津のテントウ念仏を見ると、先きの文には挙げなかったが、念仏踊の終わったあとの十三日に、当年の年番五人と来年の年番五人とが酒宴の席で濁酒を酌み交わして当渡しの式を行なう風があり、ここでの天道念仏が、同時にオビシャとしての意識で行なわれていたことがしのばれる。実際、房総地方では、オビシャを二月八日、二月十五日ごろにもよおす土地があり、また二月十五日は、釈迦入寂を記念する涅槃会の日でもあるので、コト始め、オビシャなど民間の農耕儀礼に仏教儀礼が混合するのはごく自然であった。谷津の行事で、大日如来を海辺の浜宿の堂から迎えてきて、線香・練香のほか鏡餅や神酒を仏前に供え、年番渡しの酒宴のあとふたたび如来像を浜宿へ送る儀礼など、たとえば、仏を神に取り替えれば、香取郡小見川町一の分目境宮神社の初午のオビシャなどにも通じており、天道念仏

が、もともと農村における年始めの農耕祭事に依拠して成立したものであったことが察しられる。

さて、この谷津の念仏はその後漸次簡略化したが、それでも近年まで、三月十日、十一日の両日、大日如来像をもつた壇のまわりを、男女の老人が、鉦・太鼓を鳴らしながら「なんまいだ、てんどうだ」と念仏を唱えて踊りまわる儀礼を伝えてきた。⁽⁴⁾

船橋と幕張の天道念仏

一方、谷津から海岸続きの船橋市の町々でも、かつて天道念仏をさかんに行なっていた。幕末に出た『江戸名所図絵』には次のように記されている。⁽⁵⁾

船橋市宮の内の東光寺及漁師町の不動院夏見の薬王寺等の境内に於て執行せり。毎歳二月十六日に始り同十八日に終る。昔は十七日の間執行せしも今は二夜三日とす。堂前に土を以壇を築き竹を以柱を設け、これを梵天と称し、其四方に四の門を開き四十八柄の神幣を建、注連を引はゆる等皆悉く諸の仏天に表したり。内に大日如来の像を安して本尊とし、百味の飲食を供養せり。其詰衆の道俗は各一昼夜此間六度つ、垢離して淨衣を着し、白布を以て造る所の宝冠を頂き、三宝諸尊の御号を称へて敬礼し六根懺悔の文を唱ふ。又其間には弥陀の称号を唱へ鉦太鼓を打鳴して梵天の四方を右繞する事数回晝夜に間断なし、相伝ふ往古弘法大師出羽国湯殿山を始めて踏分給ひし頃同国山形の東南天道村といふ地に於てこれを開闢し給ふを興基としては五穀成就の為の行事なりと言ならはせり

右の記事を見ると、ここでは子供の募集めや大日如来像の送迎・年番渡しの儀礼はないが、四門をまわりに構えた壇を中心に念仏踊を修するのは、谷津にひとしい。

いまこの東光寺（現宮本町）、不動院（現本町）、薬王寺（現夏見）の行事は中絶状態で見ることができないが、かつてこの地方の天道念仏を調査された和洋女子大学教授乾克己氏と薬台高校教諭松田章氏の報告によれば、調査時の昭

和四十一年ごろ、不動院では三月二十七日から四月初旬にかけての一日を天道講と称して念仏踊を踊るならわしがあり、また海神の念仏堂では毎年三月八日、堂前の庭に梵天を立てて、そのまわりで男女老人たちが天道念仏の踊を踊ったという。梵天は『名所図絵』にいうような手の込んだものではなく、台の四方に背の高い神幣を立て、その間に小幣を立て並べ、中央に大日如来像を安置したもので、それを取り巻く踊手のリーダーは桶胴風の縮太鼓を首から掛け、またスリ鉦を持って、これを打ち、一般の踊手は扇子を手にして踊った。

一方、千葉市幕張でも天道念仏がさかんで、前記の乾・松田両氏の報告によれば、三月十三日から三日間、幕張一、二丁目の人は区内の大日堂に、幕張三、四、五丁目の人は区内の宝幢寺に集まって天道念仏をもよおした。参会者は、毎月二十一日を定例日にして集まる大師講の老人男女で、大日堂の次第を記すと、十二日に講員たちが集まって梵天をつくり、大日堂前に東向きに据える。梵天は、四角の台の中央に三メートル余の柱を立てて神幣にしたもので、大日如来のシンボルでもある。台の四隅は竹で囲み、竹の間に、御山四十八尊の諸仏の依る神幣を立て並べる。その夜は宝幢寺から住職が来て祈禱し、翌十三日朝には講員の長老が梵天前で、御山四十八尊の名号を順次に唱え、昼近くになって講員の男女が梵天を取り巻いて念仏踊を踊る。男が鉦・太鼓を打ち鳴らし、女は手拭で頬被りをし、単純な手ぶりで踊りめぐったという。

念仏踊と小念仏

以上見るところ、かつて農耕儀礼との習合の形を色濃く見せていた天道念仏も、時の経過と共に漸次省略を重ねて、祭壇の荘厳なども簡素になったことが考えられる。

おそらく、もともとは、『常陸国志』下巻にいう、毎年三月、稲蒔きの時男女が寺社の庭で発願文・念仏を唱え、鼓や鉦を打ち鳴らしつつ踊りまわり、日の出を拝して日没に至るといった形が、天道念仏の古型であったろうか。そのこ

とから、たとえば南常陸地方の農村で、四月十日を天道念仏の日とし、

麦の花見、老人連の虫送り、鉦を叩いて野を廻る。其鉦の音を嫌ふて害虫が山へ遁げ込むと云ふ。珠数を繰り百万遍、各自重箱を携へる。⁽⁸⁾

といった風習も生まれたのであろう。だから元来が野外の行道儀礼で、谷津でも布施、船橋、幕張でも、屋外を祭場としたのはそのためで、そして、目を追うて歩くという形に、日の聖格化である大日如来を壇上にまつり、人々がそのまわりを念仏踊躍するという形が生まれるようになったとみられる。

武西の場合は、屋内を道場とするが、これはおそらくのちの改訂でもあろう。そして、仏壇の莊嚴なども赤幣一つで、いかにも簡略化の様子が見えるが、ただ、武西の場合、注目されるのは、最後に踊られる称念仏踊である。

この踊は、前に記したように、足でいえば、浮き足、跳ね足を主体にし、手でいえば、両手をはたきように流したり、その手をカイグリするように掬ったりしてから、右手をかがけて掌をクルリとめぐらして、それを左手でもする……という形のものであるが、一つ一つを見ていくと、その振りは、現在房総地方に流布する、粉屋踊・のほほん踊・中山踊・万作踊・おしゃらくなどとよばれる集団舞踊の、手ぶり足さばきに通じるものが多く、発生的に見ると、念仏の踊振りがまずあって、その振りのバリエーションとして粉屋踊などの所作が生まれたのではないかという気がする。

その想定がかならずしも的はずれでないのは、粉屋踊、のほほん節など一連の踊の村々における伝承の場が、もっぱら念仏講の、仏式後に行なう団樂の席である点で、つまり、念仏をみんなで勤めたあと、みんなで余興に歌ったり踊ったりする。その時、念仏の時にはやした太鼓や鉦をそのまま使って、粉屋踊やのほほん節などを踊ったのである。

粉屋踊は、下総山武郡白枿の粉屋の娘を題材にした口説調の歌で、のほほん節は、同類の歌ながら、ノホホンの囃し詞をもつのでその名があるが、振りはいずれも同じようなものである。中山踊も同種の踊で、ただ下総中山地方（現中市川市）ではやったのでそう呼ばれたに過ぎない。そして、これら粉屋・のほほん・中山などの踊を総括して「小念

福島県白河市根田に安珍念仏踊というのがあり、これは道成寺伝説に出てくる奥州下りの僧安珍の生まれ故郷と伝える根田で、その安珍の供養に踊られるものであるが、その時、初めに念仏講員の老婆たちが、鉦・太鼓のゆるやかなりずむにのって念仏踊を踊る。その振りは、ものを拝む手を中心にしたもので、いかにも宗教性に富んでいるが、途中、急にテンポが早くなつて、囃子が急にはなやかなものに転じ、それにつれて踊も急に活潑になって、その振りも、先きの拝みの手をくずした奔放多彩なものになる。これを「くずし」と呼ぶのだが、この「くずし」の手になって、安珍念仏踊はにわかに舞踊としてのおもしろさを見せ始める。

この、念仏踊とくずしの関係が、房総では念仏踊と小念仏の関係になるわけである。

坂戸の大十夜念仏

天道念仏に限らず、他の年間定期の勤めにも、土地それぞれの念仏踊を踊られることがあり、それにも、おおよそは武西の踊に共通した振りが基本的にはあり、これが土地土地の小念仏系統の踊を育てる培養素になったことが指摘できる。

佐倉市の、国鉄佐倉駅の南方七キロの地点にある坂戸に伝わる大十夜の念仏踊も、その一つである。

坂戸では六十過ぎの隠居身分の男女の講員が年間を通じて、①月次念仏（毎月九日）②お閻魔さまの念仏（正月十六日）③観音様の念仏（正月十八日）④涅槃講（二月十五日）⑤彼岸念仏（春秋の彼岸）⑥開山忌⑦盆念仏（八月十四、十六日）⑧お十夜念仏（十一月十四日）を、区内の浄土宗寺院の西福寺で毎度もよおすが、そのうち、⑧のお十夜念仏については、三十三年に一回、大十夜と称する特別の祭儀をいとなむ。

その祭儀というのは、西福寺開山良栄上人の御輿を奉じて、僧侶・寺侍・檀徒総代・講員・童児などが行列をつく

り、仏旗・花・供物などを捧げつつ寺を出、近くの十夜塔まで練り歩くことである。この時講員は長褶袴を着、道中、笛・太鼓の囃子につれて「サエダ、サエダ、サーサエダ、ヤレコノ、ヤーサエダ」と口々にはやし立てる。そして、十夜塔の広場へ着くと、輪になって、「しもつけ念仏」「朝がお」と称する二つの念仏踊を踊るのである。

このうち、「しもつけ念仏」が本格の念仏踊で「朝顔」はくずしの芸かとも思われるのだが、「しもつけ念仏」の歌詞は次の通のである。

ㄱ 帰命 ナアアア頂礼 下つけのエヨコノ

岩舟地藏のお召し舟 オヤコノ 舟はナアアア 白金 エヨコノ 艫は小金 柱は金銀まき柱 オヤナア 綾と錦 帆にあげて エヨコノ 極楽浄土へすらすらと

ㄴ 極楽浄土のこの門は エヨコノ 錢でも金でも開かぬ門 オヤコノ 金とナアアア 檀木を手に持ちて エヨコノ お念仏六字で 押しひらく オヤナア 即身成仏 なむあみだ エヨコノ なむあみだぶつ なむあみだ

この歌にのつての振りは、

① 左足前へ出しながら、両手を右側にあげる。

② 右足前へ出しながら、両手を左側にあげる。

③ 一と同じ。

④ 左足ひきながら、手を左へ引く。

⑤ 右足ひきながら、手を右へ引く

⑥ ④と同じ。

⑦ 束立ちになり、両手、掌を前に押し出すように出す。

⑧ その手をあげて合掌する。

というもので、きわめて単純だが、合掌で締めくくる、いかにも念仏踊らしい形を示している。そして次の「朝顔」は、二本の日の丸扇子を持つての踊だが、基本的には念仏踊で（地元では開山様と呼ぶ）、いうなら「下つけ念仏」を二本扇の踊に発展させているという感じのものである。

坂戸では、この二つの念仏踊は現在は大十夜の時しか踊らないが、西福寺開山の御霊代と敬する祐天上人（一六三七〜一七一八）の筆になる南無阿弥陀仏の板を納めた箱の裏書を見ると、「道俗相集踊躍歡喜鉦鼓擊修大念仏会」とあり、この裏書の年次が宝暦四年（一七五四）であるところを見ると、江戸時代の初中期には折りにつけて踊躍念仏が行なわれていたことも考えられる。

また、西福寺所蔵の文書に『下総国印旛郡坂戸村西福寺三尊之弥陀并大念仏之縁起』というのがある。これは、「文安二年（一四四五）七月六日当寺弟子四世弁譽誌之」とある『開山良榮上人略縁起』と、「天文二（一五三二）戊子年（筆者注・戊子ならば享禄元年（一五二八）になる）十月十一日西福寺十代仙譽記之」とある『大念仏講中三尊弥陀之由来』を、礼享堂三枝という人が幕末期の弘化三年（一八四六）秋上旬に筆与したもので、原本は見る機会を逸したが、佐倉の研究者青柳嘉忠氏が書写したもののコピーを拝見した。

このうち「開山良榮上人略縁起」を見ると、浄土宗名越流第五祖で大沢流の祖として知られる良榮理本（一三四二〜一四二八。この年に疑問を持つ説もある）が金剛山願生院西福寺の開山で、鎌倉光明寺で修業ののち坂戸に来て寺を興し、念仏修行に専心していたところ、近隣の者から念仏の鐘響喧しと謗られ、諸人の放逸なる心を宥め、すみやかに念仏門に引き入らせる方便として踊念仏を發起し、その成否を鹿嶋明神に参籠して念じたところ、明神が老翁の姿で現じ、「善哉化益の因縁まち／＼なれば、衆生の性欲に随て如来の本意を教る也。汝が意願の如く帰国して冠を戴き白装束を着し、鐘鼓をならし踊念仏をすべし。其時諸人、歡喜して六字の名号信し奉行あらむ（下略）」と上人に告げた。感泣した上人は急ぎ帰国して踊念仏をもよおしたところ、「諸人招かざるに來たりて念仏帰依信仰す。然より以來遠近

の善男女四十ヶ村の余、念仏講を結び毎年毎月十五日に踊念仏」するようになったという。

その後、良栄上人入寂ののち、当寺の弟子願西が大念仏の講主となって日夜念仏の修行に励んでいたが、永享七年（一四三五）三月十三日、にわかに病の床について一時息が絶え、その間、魂魄が安養世界に逍遙して、そこで冠、白装束で踊念仏にはげむ一団に会い、中にいた良栄上人から、一団は生前の坂戸大念仏の講員で、踊躍念仏の修行のおかげでいま極楽の南門に当たるとこの安養世界の金堂の中に住居している、だから「汝娑婆に帰って此所を語って諸人を勧め、諸衆と成へし」とのことばを聞いてたちまち甦った。その時枕頭において願西の体を撫でていた願普上人は願西からこの安養界での話を聞いて感じ入り、「寔に如来の善巧方便薩埵の衆生引接の化益ならん云々」と述べ、以後願西の甦生譚は広く近隣に聞こえ、良栄上人発起の大念仏講の踊躍念仏は絶えることなく行なわれるようになったという。

すわり念仏と立ち念仏

右の縁起で示すところ、坂戸の念仏講は本来踊躍念仏を主体に結成せられたもので、したがってかつては年間を通じて踊が踊られたものらしい。

それがどういふわけで、いつごろからすたれ始めたのかは現在では不明だが、いまいる講員の最年長の八十才の古老の記憶では、前回は昭和三十年十一月十五日で、その前はそれから三十三年以前であったといい、その前も三十三年遡ったとか聞いている……というから、少くとも年間を通じて行なっていたのは明治以前ということになるのであろう。

この坂戸以外でなお念仏踊を伝承している土地に、銚子市に近い九十九里海岸の海上郡飯岡町と海上町があるが、ここでは、飯岡町の飯岡（南町・永井岡）・八木（出戸・寺内北・八祖）・海上町の後草（東区・西区）の三地区八集落が合同して、①旧暦二月十日、②秋の彼岸明けの日、③旧暦十月十日、④旧暦十一月十日の四回、①は八木で、②は飯岡で、③は後草でそれぞれ大念仏講をひらき、その折り念仏踊を踊る。¹⁰⁾

いずれの折りも、各集落にある寺院の部屋に阿弥陀三尊の軸を掛け、その前に団子・酒・花を供え、人々は庭に莫座を敷いてすわって念仏を唱える。最前列には鉦役（鐘法願人と呼ぶ。スリ鉦・檀木・数珠を持つ）八人、二列目には太鼓役（法願人と呼ぶ。桶胴型の締太鼓・俘・数珠を持つ）八人が並び、三列目以下は数珠だけを持った一般講員が並んですわる。ただし、最前列の鉦役のみ、建物に背を向けて、二列目の鉦役と向かい合う。行事次第は、次の通りである。

- 1、着座 2、礼拝（三尊に対して） 3、読経（懺悔文・三帰・三竟・光明真言・舍利礼の唱和） 4、奏楽（鉦・太鼓をはやしての念仏唱和） 5、読経（発願文唱和） 6、奏楽（4に同じ） 7、読経（十三仏唱和） 8、奏楽（4に同じ） 9、読経（極重文唱和） 10、奏楽（4に同じ） 11、中食 12、立奏（鐘・太鼓を打ちはやしての立ち念仏） 13、読経（法界唱和） 14、奏楽（4と同じ） 15、御影巻き（次の当番の集落が御影を巻く） 16、立奏（鐘・太鼓を打ちはやしての立ち念仏と散華） 17、太鼓寄せ手打ち（太鼓を中にして法願と鐘法願が手打ちする） 18、当番引継ぎ披露 19、解散

右のうち、中心となるのは、前半から半ばにかけて行なわれる「奏楽」と、半ばから後半に行なわれる「立奏」である。奏楽は、鉦・太鼓の打ちはやしにつれて一般の講員がすわったままで、「南無阿弥陀仏」を繰り返して詠唱するもので、いうなら「すわり念仏」である。対して「立奏」は、鉦・太鼓のはやしにつれて、講員が立って念仏を詠唱しながら庭を徘徊踊躍するというもので、いうなら「立ち念仏」であり、「踊躍念仏」である。

この「すわり念仏」と「立ち念仏」の対照は、まず前者が行なわれ、のちに後者が始まるという形を取っているのを見れば、この大念仏の勤めにおいて、初め講員たちが厳肅に威儀を正して「南無阿弥陀仏」の詠唱を繰り返すうち、次第に気分が昂揚してきて、やがてそれぞれ自然に立ちあがってその場を徘徊し始め、そして踊躍を始めるという順序次第から構成されたもののように思われる。前に記した習志野市谷津の天道念仏の記事で、その老男数十人の踊を評して

「踊りといひて躍るにはあらず摂州四天王寺の踊性仏にひとしく一心不乱に念仏して誠に感にたえて踊る如くに見ゆるなり」と述べているくだりがあるが、たしかに「踊りといひて躍るにあらず……一心不乱に念仏して誠に感にたえて踊るごとく」に自然に踊躍の形になっていくのが念仏踊の原理であらう。

これも前述の印西町武西の天道念仏で、初めに全員すわったままでの称念仏を行ない、のちに講員がこもごもに立って称念仏踊を行なったのも、この原理に基づいてのことで、つまり念仏詠唱の繰り返しの中から歓喜恍惚の情を募らせ、その心のたかまりから自然に立ちあがってその場を旋廻し始め、そしてやがては興奮のままに、手をあげ足をはねて踊躍するという、人間生理の原理から生じた儀礼作法であったかとみられるのである。

その点からみると、飯岡の念仏踊は、きわめて興味深いものであった。すなわち、初めの奏楽においては、スタート時、鉦・太鼓のテンポもきわめて遅く、節まわしも単調であったものが、次第に調子をたかめていって、「立奏」になるやテンポも急になり、リズムのメリハリも強く、そして動きも、当初は単調な旋廻から、のちには伸びやかな踊躍を示すようになり、座唱→立唱→旋廻→踊躍の展開をあざやかに示すのである。

こうした形が他の地方にも数多く見られるかどうか、今後精査を重ねなければならぬが、現在わたしなどの見るところでは、念仏踊が、単独に念仏踊として成立するのではなく、まず、座しての念仏唱和があり、やがてその唱和に誘発された形で踊が演じられるというパターンが、念仏講における念仏踊の構成上の基本であったかと思われる。

そのことは、念仏踊というものが、そもそも念仏唱和の長々しい反覆から生じた宗教的興奮の生理的所産として成立したことを想像させる点でもあり、その意味で、今後なお、念仏踊における座唱と立唱、そして旋廻（行道）と踊躍の問題は検討を重ねる必要があると思う。

注

(1) 各地とも加入年令を不定とするも、だいたい六十歳を加入のめどとしており、一戸から一人で、隠居身分になった夫ないし

は妻がつとめる。六十になっても、上に隠居身分の親、舅、姑がいて、それが講員でいれば、加入はは許されない。土地によって男だけ、女だけと限定することもある。

(2) 仏教大学民間念仏研究会編『民間念仏信仰の研究』資料編一七六頁。(昭和四十一年二月。隆文館刊)

(3) 晋雪庵柳涯「テントウ念仏」(『風俗画報』十四号九一〇頁。明治二十三年三月)

(4) 『日本祭祀地図』I春季編一一八頁。(昭和五十一年三月。国土地理協会刊)

(5) 乾克己・松田章「幕張『天道念仏』見聞記」(『房総文化』八号五九〇六四頁昭和四十一年八月) 所載のものに拠る。

(6) 昭和五十四年二月、船橋市教育委員会におもむいて調べたところ、近年まで天道念仏を行なってきたのは次の寺堂だという。三月十五日がほとんどで、ただ、現在ではあまり行なっていないという。不動院(本町)・光明寺(飯津満町)・正法寺

(田喜野井町)・長福寺(八木ヶ谷町)・西法寺(坪井町)・東光寺(宮本町)・念仏堂(海神)・青蓮院(楠か山町)・連蔵院(鈴身町)

(7) (5)と同じ。

(8) 吉原春園「南常陸農家年中食物行事」(『郷土研究』四卷四号五四頁。大正五年六月)

(9) 同記録は、中地昭男「西福寺をたずねて」(『西佐倉地方文化財』9号一〇四頁。昭和五十二年三月) にも翻刻記載されている。

(10) 飯岡の大念仏に関しては今井福治郎「飯岡の大念仏講」(『房総文化』七号一〇五頁。昭和四十年五月。のち同氏著『房総の祭』二九二―三〇一頁所収。昭和四十年。桜楓社刊) が詳しい。